

「なんか」の意味と用法

渡 邊 久 美

1. はじめに

最近、TV や友人の会話で、「なんか」という言葉をよく耳にする。「なんかいいことあったの?」「なんか変なお天気ですね」「なんかさあ、なんかよね」など、注意して聞いてみると、その使用頻度は相当なものである。この「なんか」とは一体何かという疑問から、その意味と用法を明らかにしたいと考えた。

村田 (1990) は、「話し言葉によく現れる「なんか」は、日本語教育では中級以上の学生を対象としたテキストの会話文で取りあげられていることが多く、「なんか」という語は辞書、文法書によって様々な取り上げ方をされており、その用法については「など」の口頭語として説明されたり、「など」と同様に扱われているのが普通である」と述べている。辞書で「なんか」という項目を調べてみると、連語の「なにか (何か)」の転という説明と、副助詞の「など」と同じという説明がほとんどである。しかし、辞書によっては「なにか」や「など」の一部と同じと限定している場合があったり、副詞 (または副詞的用法) としての項目を別に設けたりと、辞書の説明を見る限り、統一した説明がされておらず、「なんか」の意味が分かりにくい。

そこで、本研究では、「なんか」の意味と用法の全体像を明らかにし、実例を分類した上で、「なんか」の実態を把握することを目的とする。

2. 先行研究

先ほども述べたように、「なんか」には連語の「なにか」という意味と助詞の「など」という意味がある。それぞれについて、先行研究と辞書での説明をまとめる。

2.1 「なにか」(連語) と同じ「なんか」

2.1.1 辞書による説明

用例は省略している。また、「なんか」を調べて、「なにか」と同じとあれば、() 内に同辞書の該当部分を付記した。

大辞林第二版机上版 (1995) 三省堂

なんか【何か】(連語) [「なにか」の転]

- ① 「なにか」**㊦**① に同じ [内容が不定、あるいは未知であることや物を指す。]
- ② 「なにか」**㊦**② に同じ [「…かなにか」「…やなにか」の形で] 同類のものを指し示すのに用いられる。また、はっきりと言わずにぼかして言うときの用いられる。]

③ (副詞的に用いる)「なにか㊦③」に同じ〔(副詞的に)何だか。どうしてか。なぜか。〕

岩波国語辞典第5版デスク版(1994) 岩波書店

なんか

①【何か】[連語]「なにか」の音便。

〔なにか㊦【何か】[連語]〈代名詞的に〉何であるかはわからない、または決めない、ある物・事。〕

大辞泉(1995)小学館

なんか【何か】[連語]「なにか」の音変化。

〔「なにか【何か】[連語]㊦〈代名詞「なに」+助詞「か」〉

①〈「か」は副助詞〉感覚・願望などの内容がはっきりしない事物。

②〈「か」は係助詞。感動詞的に用いる〉ア。相手の言葉・気持ちを確認しようとする意を表す。イ。いままで述べてきたことや相手の言葉などを否定してそれとは反対の趣旨を述べるときに用いる。いやいや。とんでもない。

㊦〈副詞「なに」+助詞「か」〉

①〈「か」は副助詞〉はっきりした訳もなく、ある感情が起こるさま。どことなく。なんだか。

②〈「か」は係助詞〉ア。疑問の意を表す。なぜ…か。どうして…か。イ。反語の意を表す。どうして…か、いやそんなことはない。〕

学研国語大辞典(第8版)(1980) 学習研究社

なんか【何か】

㊦[連語]口語。{不定称の代名詞「なに」に助詞「か」がついた「なにか」の転じたもの}

①任意の、また、不定の物・事をさす。

②並列の最後に並べられ、それらに類する不特定のある物をさす。

㊦[副]どことなく。

日本語大辞典第二版(1995) 講談社

なんか(連語)→なにか(何か)㊦〔はっきりとわからない、または決められない事物。なんか〕

広辞苑 第三版(1983) 岩波書店

なんか【何か】(ナニカの音便)何事か。何ものか。

〔なにか①(代名詞的に)イ(不定の物事をさす)何かが…か。何ものか。〕

ロ (不定の多くのものをさす) 何やかや。

② (副詞的に) イ (原因・理由を疑う) なぜ…か。ロ (自責・詰問の意を含む) どうして…か。

ハ (反語の意を表す) どうして…か。

ニ (不明な理由や程度を表す) どうしてか。なぜか。

③ (感動詞的に) イ (上の語に反対のことを言う) いやいや。どうしてどうして。

ロ (相手の言葉に反対して言う) いやいや。なあに。)

辞書による「なにか」の意味をみても、「なにか」の本質的な意味がよく分からないことに気付く。また、古語の「なにか」の意味も含まれている。そこで、先行研究でまとめられている、現代語の不定表現の「なにか」の本質的な意味を明確にし、次にその用法をまとめることにする。

2.1.2 不定表現 (「なにか」の意味・機能)

「なにか」とは、不定語 (「なに」「だれ」「いつ」「どこ」「いくつ」「どんな」などの内容が不明、不定である未知項X)¹⁾と疑問助詞 (「か」「かしら」「やら」など)を用いた「不定表現」の一つである。話し手がある対象を不定表現を用いて表現するまでの過程を森川 (1991a)に基づいてまとめると、次のようになる。ある対象²⁾を話し手が言語表現化する場合、話し手は「こと」を知覚・感覚で把握し、その構成要素や在り方・働きを分析する。そのとき、「この時点で、この場所にある、これ」と認知でき (<+同定性>)、かつ、それに該当する概念³⁾に決定的に写すことができれば (<+確定性>)、その対象は確定表現をなされる。しかし、認知はできても (<+同定性>)、概念化ができない場合 (<-確定性>) や認知できない (<-同定性>) ので、おのずから概念化できない (<-確定性>) 場合は不定表現をなされることになる。… (省略) …結局、不定表現とは (<-確定性>) の意味素性を持つ、即ち、概念上不定的な在り方で存在している対象について、そのような在り方のまま、叙述する言語表現であると言える。」この説明に基づいて、例を示すと次のようになる。

<+同定性> <-確定性> →不定表現

- ・そんなことをじっと考えていた湯の中で、背中にとん、と何かがあたった。何か固いもの、水に浮かんでいる何か大きなもの。1-34⁴⁾

<-同定性> <-確定性> →不定表現

- ・何か大切なことを伝えたいのに、うまく言葉が見つからない。2-258

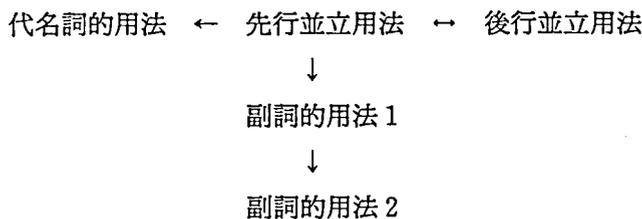
本稿で扱う「なにか」の意味を森川 (1991a, b) の論文を中心にまとめてみる。「なにか」というのは不定表現の一つである。「不定表現とは、ある時点において、話し手にとって不

明・未知であるか、それ自身が不定・未定であるかのように見える対象を、そのような在り方のままに叙述する言語表現である」(森川、1991b)と定義できる。この「対象が不定・未知である」というのは、次の二つの場合がある。「一つは、話し手が事態(「こと」)の中に構成要素として存在する事物(「もの」)を同定できない場合と、「こと」の全体像は把握可能で、その中の「もの」についても同定可能という状況にありながら、「こと」や「もの」を確定的に概念化できない場合である。」(森川、1991b)そして、その不定表現の中でも「なにか」は他の不定表現(「どこか」「だれか」「なぜか」など)とは次元が異なり、固有名詞レベル、一般名詞レベルの下位概念から「もの」「こと」という上位概念までに対応する⁵⁾。つまり、「なにか」は「もの」「こと」の全体を認知できない、もしくは認知できても概念化できない、話し手の認識内の疑問をそのまま叙述する言語表現である。また、対象について疑問を持ち、そのまま表現するということは話し手が不明・未知である「もの」「こと」の内容を明らかにしたいという志向を潜在的に持っていると考えられる。

2.1.3 「なにか」の用法

不定表現の一つである「なにか」だけに焦点を当て、用法についてまとめた論文には、森川(1991a, b)がある。奥津(1985)は「不定詞に「か」のついた「Whか」は名詞として働く」と述べているが、森川(1991a, b)は、「なにか」を次の五用法に分類、関連付け(図1参照)、「なにか」は基本的に「副詞」であるという結論に至っている。『基礎日本語辞典』(森田、1988)では、代名詞的用法と副詞的用法に分けている⁶⁾。

(図1) (森川、1991a, b)



それぞれの用法については、3.1 で詳しく引用する。

2.2 「など」と同じ意味

2.2.1 辞書による説明

大辞林第二版机上版(1995) 三省堂

なんか(副助) [代名詞「なに」に係助詞「か」の付いた「なにか」の転。話し言葉でのごくだけた言い方に用いる]

①「など(副助) ①」に同じ [多くの事柄の中から、主なものを取りあげて「たとえば」の気

持ちをこめて例示する。多くの場合、他に同種類のものがあることを言外に含めて言う。]

- ②「など（副助）②」に同じ〔ある事物を特に取りあげて例示する。ア、軽んじて扱う場合。イ、叙述を弱めやわらげる場合。この場合には例示の気持ちはあまりない。〕

岩波国語辞典第5版デスク版（1994）

なんか

- ②〔副詞〕「など」と同じ。〔例として示す意を添える。同類の物が他に有っても無くてもよい。ア、同類としてとらえる事物の代表例に挙げるのに使う。イ、（同類のものが無くても）具体例として持ち出すのに使う。→多くは、軽く扱う気持で言う。〕

大辞泉（1995） 少学館

なんか〔副詞〕《代名詞「なに」に副助詞「か」の付いた「なにか」の音変化から》

- ①一例を挙げて示す。…など。
②ある事物を例示して、それを軽んじていう意を表す。
〔など ①一例を挙げ、あるいは、いくつか並べたものを総称して示し、それに限らず、他にも同種類のものがあるという意を表す。…なんか
②ある事物を例示し、特にそれを軽んじて扱う意を表す。…なんか。…なんて。
③婉曲に言う意を表す。…でも。…なんか〕

学研国語大辞典（第8版）（1980）

なんか【何か】

㊦〔副助〕{連語「なんか」が助詞化したもの} 副助詞「など」の用法にほぼ同じ。

- ①などの(2)〔それだけとは限らない形で、あくまで一例として例をあげるのに用いる。表現をやわらげるのに役立つ。〕
②などの(3)〔修辭的に例示の形をとることによってかえってその語を強めるのに用いる。
イ{下に否定的評価を伴い} その評価の対象に対する思いもよらないといった気持ちや、けいべつ・けんそのん気持ちなどがこめられる。
ロ不遜・誇示の気持ちなどがこめられる。〕
参イなど(1)（ある例をあげて、その例が代表する全体を合意するのに用いる）の用法はあまり見られない。
ロ「など」よりくだけた感じが強い。

日本語大辞典第二版 (1995) 講談社

なんか (副助) {「なにか」の転。「など」とほぼ同じ用法}

①同種のものの中から一つを例として示す。

②ある事物を取り立てて、軽視・無視する意を表す。例) あの人なんかどうでもよい。

広辞苑 第三版 (1983) 岩波書店

なんか (副助) ①一つの例として示す。

②望ましくないもの、価値の低いものとしてあげる。など。

すべての辞書に共通している意味は、①例示 (表現をやわらげる効果もある) と②ある事物を取り立て、軽蔑、軽視、謙遜の意を表す、である。本稿では、この2つの意味を「なんか」の助詞としての意味とする。

2.2.2 「なんか」の用法

「なんか」に焦点を当てた研究は、村田 (1990) のものがある。これは、「なにか」と「など」を日本語指導では切り離して指導したほうがよいという観点から、「なんか」の用法について「なんか」と結びつく文法的な形態とは何か、という形態面に視点を当てた分類を行っている。つまり、副助詞の「なんか」のみを扱っており、独立して用いられる「なんか」(連語の「なにか」と同じ用法) は取り上げていない。しかし、実際に使われている「なんか」を考えると、それでは不十分である。

2.3 フィラーとしての「なんか」

松浦 (1996) によると、フィラー⁹⁾は「主に、適当な表現が見つかるまで、或いは発語内容をまとめたりする時間を稼ぐ機能を持ち、時にその機能を持たず、相手の注意を引きつけたり、ためらう気持ちを表したり、リズムを取ったりするために文頭または文中で用いられ、実質的意味を持たないもの」と定義できる。そして、その機能を先行研究をもとに大別すると以下のようになるとまとめている。

①時間稼ぎの機能

②聞き手の注意を引きつける機能

③ためらいの気持ちを表す機能

④丁寧度を増加させる機能

⑤語にリズムを作る機能

これをもとに、実際に日本語母語話者の会話を分析した結果をまとめているが、その中で「なんか」は特に20代によく使われるフィラーとして特徴づけられている。分析は20代と30代のものしかないので他の年代の使用状況ははっきりしないが、「なんか」がフィラーと

しての用法を持つと考えられる。Maynard (1990) も、「なんか」の用法としてフィラーを挙げている。

3. 「なんか」の意味と用法

3.1 用法の分類

まず、2. を参考に「なんか」の用法を次の8つに分類した。

- 連語として ①先行並立用法 ②代名詞的用法 ③副詞的用法1 ④副詞的用法2
⑤後行並立用法
助詞として ⑥助詞的用法1 (例示) ⑦助詞的用法2 (軽蔑・軽視・謙遜)
談話のレベルで ⑧フィラー

それぞれの用法について、説明する。①～⑤は、森川 (1991a, b) を参考にしている。

①先行並立用法

{<なんか> <名詞句>}

<-同定性、-確定性> <+同定性、-確定性>

- ・「結婚する前に、なんかコレッていう思い出が欲しかった。」3-54
- ・なんか大切なことを伝えたいのに、うまく言葉が見つからない。2-258

②代名詞的用法

{<なんか> <格助詞/だ>}

一語で代名詞としての機能を果たす。「なんか」が①の後行名詞句を吸収して、実質的なものを指示するに至っていると考えられる。

- ・「何かを感じとるんですかね。虫の知らせ？」2-79
- ・今のカズミは、とても可愛いし、それに何かが抜け落ちてしまったかのようにはかなげだ。4-106

③副詞的用法1

{<なんか> <述語句 (動詞/イ・ナ形容詞/名詞+だ/連語/文)> のような構文構造

<+同定性、-確定性>

- ・「何か手伝いましょう。」と彼は立ち上がってやってきた。1-123
- ・「私ひとりでつかまえて、なんかいったって、きっと駄目だろうと思って」3-51

④副詞的用法2

{<主語は> <なんか> <特定の叙述形式>}

<-同定性、-確定性>

特定の叙法形式（述語句（の）ようだ／みたいだ／らしい、〈動詞連用形／形容詞語幹〉そうだ、など）と意味的な呼応関係を結ぶに至る「なにか」。

- ・それで南は何かふっきれたように言った。2-241
- ・なんか、ズルしてる気がする。2-143

⑤後行並立用法

{〈名詞句〉〈かなんか〉}

「など」「とか」等に通じる副助詞的な意味・機能を果たす。

- ・「兄さん、こちらら長旅で喉渴いたな。ビールか何かある？」2-42
- ・（心配して）「血圧かなんかかしら？」3-116

⑥助詞的用法1（例示）

{〈名詞句〉〈なんか〉}

それだけとは限らない形で、あくまで一例として例をあげるのに用いる。表現をやわらげるのに役立つ。

- ・こっそりと缶ビールなんか持ち込んで、やけ酒というものをやってみようと、彼女は提案した。4-94
- ・「あ、これは杖だよ。杖がわりだ。階段なんかじゃあった方がいいんでよ」3-124

⑦助詞的用法2（軽蔑・軽視・謙遜）

{〈動詞のて形〉〈なんか〉〈否定形ナイ〉}

{〈イ形容詞-く〉〈なんか〉〈否定形ナイ〉}

{〈ナ形容詞（で/じゃ）〉〈なんか〉〈（では/じゃ）否定形ナイ〉}

{〈副詞〉〈なんか〉〈否定形ナイ〉}

{〈名詞／名詞句〉（助詞）〈なんか〉〈肯定形／否定形ナイ〉}：これだけ否定表現と呼応しない。

例示の形をとることによってかえってその語を強めるのに用いる。

次に否定的評価を伴い、その評価の対象に対する思いもよらないといった気持ちや、軽蔑・謙遜の気持ちなどがこめられる。また、不遜・誇示の気持ちなどがこめられる。

- ・「あっ、男に逃げられた私の言うことなんか、あてにならないと思ってるでしょ。」2-116
- ・「私、こんなことで、絶対、あなたと結婚なんかしませんから」3-147

⑧フィラー

会話の中で、話し始めるときに使ったり（opener）、話し手が何を言ったらいいかわからなくて言いよんだり、言いにくいことを言うときにためらったりするとき、その間を

つなぐことば (filler) として使われる。本稿では、これらの用法をまとめて、フィラーと呼ぶことにする。

- ・香織「ふりかえったって、なんにもないし、先行きもなんにもないし、なんかもう…」
理一「鬱病だ、こりゃ」
香織「なんかギンギンするような思い出があれば、……3-71
- ・「ハハ、何か、隣、話の内容が…何か……」教授は小声でそう言うと、ひとりで照れている。2-107

3.2 方法

3.1 の分類をもとに、用例を分類した。用法の①～⑤は基本的に「なにか」と同じなので、「なにか」も用例として扱った。用例は、テレビドラマのシナリオと最近出版されたもので、普段の生活で用いていることばに比較的近い日本語で書かれている小説やエッセイなど¹⁰⁾から集めた。今回は上記の分類の妥当性を確かめる目的のため、話しことばと書きことばの両方を扱った。

シナリオは「人の手が加えられているから自然な用例ではない」という見方もあるが、現代の日常的なテーマを取り上げたドラマに関しては、少なくとも、そのドラマの中で使用される言語の面においては我々の普段の生活の再現に近いと考え、採用した。

3.3 結果

全380例のうち、種類別に分類した結果は以下の通りである。

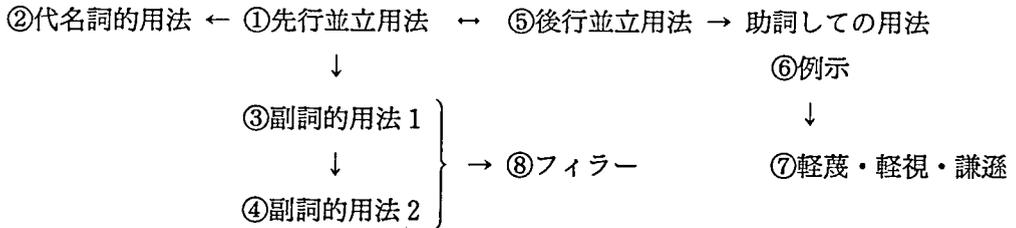
(表1)

①先行並立用法	41
②代名詞的用法	66
③副詞的用法 1	96
④副詞的用法 2	26
⑤後行並立用法	11
⑥助詞的用法 1	34
⑦助詞的用法 2	81
⑧フィラー	25
計	380(例)

4. 考察

以上、8つの用法の関係を図1を参考に、図に示すと次のようになると考えられる。

(図2)



次に、用例を分類をした際、気付いたことをまとめる。

(1) 中間的な用法の「なんか」の存在

実例を分類する際に、どちらの用法に分類したらよいか迷うものがあった。それらは次の通りである。

7) 副詞的用法(③④)とフィラー(⑧)との中間的な用法

1) 先行並立用法(①)と副詞的用法1(③)との中間的な用法

まず、③と⑧、④と⑧の中間的な用法の「なにか」のであるが、以下にその例を挙げる。

・「先輩、何か誤魔化そうとしてませんか？」

「え……？誤魔化す……？」

「何か、心の中に、ポッカリ穴があいてて、それを埋めるために、カメラ始めたんじゃないですか？」 2-275

・「顔のいい男って、見てるだけでふわんとして、抱きしめられてきゅうんとなるけど、ふわんきゅうん、ふわんきゅうんのくり返して、何か、それって、ごまかされてる気がするし……」 2-222

このように続きを見ていけば③の用法や④の用法と言えるのだが、時間的な流れによっては、⑧の用法として使われていると考えられるものがある。これは、実際の会話を分析でより明らかになると予想される。このことは、⑧の用法が③や④の用法から派生しているという上記の図の裏付けになると考える。

次に先行並立用法(①)と副詞的用法1(③)との、中間的な「なにか」の用法だが、これは森川(1991a)にも指摘があるように、「～がある」「～をする」などの形式動詞「ある」「する」(ないしそれに準ずるもの)の構文と共起するものである。今回は先行並立用法に分類した。

・何か伝言があったら伝えておくわよ。 1-146

(2) 「なにか」と「なんか」の違い

代名詞的用法(②)は「なんか」で言える場合といえない場合(または言いにくい場合)があり、10人の日本語母語話者への簡単な聞き取り調査の結果、個人差があることがわかった。用例では漢字で「何か」と書いてあることが多く、これを「なんか」ということができるかどうか、調査する必要がある。このように②に「なんか」と言えない「何か」が含まれているとすれば、表1の用例数から見て、③と⑦が「なんか」の主な用法ではないかと考える。

助詞的用法はもちろん「なんか」のみであるが、フィラーとしての用法(⑧)も「なんか」の用例だけである。フィラーとしての用法が③や④の用法から派生していると考えられるならば、「なにか」も使えそうなものであるが、「なにか」はなかった。フィラーというのは、言いよどんだときや言いにくいことを言うまえの間をつなぐものである。「なんか」にフィラーとしての用法があるのは、「なんか」がよくわからない「こと」や「もの」をわからないままに叙述する表現であり、あいまいで非限定的な表現であるという特徴から生まれたものであると考える。そして、「なんか」とほぼ同じ不定表現であると一般に考えられている「なにか」に、この用法がないとすれば、「なんか」が「なにか」より、あいまい性・非限定性の高い表現であることを示していると考えられる。もしくは、フィラーは会話の中で使われるものなので、「なにか」の音変化で、口語である「なんか」のみにこの用法があると考えられる。

(3)フィラーとしての「なんか」

「なんか」は、今までも述べてきたように、「ある時点において、話し手にとって不定・未知であるか、そのように見える対象を、そのままに叙述する不定表現」であり、対象をあいまいで非限定的に表現することができる。「なんか」がフィラーとしてよく用いられるのは、上記のような特徴から、何を言ったらよいかわからなくて言葉につまったとき、そのつなぎの言葉として便利であり、また、聞き手にもある程度の判断の余地を残しているため、言いにくいことを述べるときにためらいの気持ちを表すのに便利であるためと考えられる。聞き手はこのようなフィラーによって、話し手の心理状態についての情報を受け取り⁹⁾、理解しようとする中で、コミュニケーションを円滑に行うことができるのである。

また、先に述べたように、わからないという話し手の認識の疑いを持ち表明するのは、「その時点では不明・未知であるものを明確化したいという疑念解消志向を、話し手が潜在的にもっているということ」(森川、1991b)から発しており、その心理的状態についての情報を受け取る聞き手の注意を換気する働きもあると考えられる。雑誌などで新しい提案や重要なトピックを提示するときに、その記事を書いている記者はその内容がわかっているにもかかわらず、「なんか/なにか」を使うことがよくあるが、これは「なんか」を使うことで読者にも考える余地があり、読者の注意を引き付ける機能があるためではないだろ

うか。そのような機能から、フィラーとして「なんか」が使われるようになったとも考えられる。会話をしているときにも、同じような機能のため、発話順番を自分のものにするのに「なんか」は効果的であり、よく話しはじめに用いられる。

このように、「なんか」はもともと持っていた意味からフィラーとしての用法を持つようになったと考えられる。今回の調査で観察されたフィラーとしての用法の「なんか」の機能は、2.3の松浦(1996)によるフィラーの機能の5つの大別のうち、①時間稼ぎの機能、②聞き手の注意を引きつける機能、③ためらいの気持ちを表す機能を果たすものがあつた。⑤話にリズムを作る機能は、今回の調査が書きことばを対象にしていたのではっきりとはしなかったが、実際の会話を分析すると「なんか」がこの機能を果たすことが予想される。④の丁寧度を増加させる機能については疑問である。

今回の分類では、フィラーとしての用例は比較的数が少なかったが、実際の会話を録音し分析すると、今回の調査より増加すると予想される。

5. 今後の課題

今後の課題として、次の3点が考えられる。

- ・考察の中でも問題になったが、「なんか」は会話で使われることが多いので、今回の分類を用いて、実際の会話を分析する必要がある。
- ・「なんか」と「なにか」の使用上の違いを明らかにする。
- ・「なんだか」「なんとなく」「なんて」など、「なんか」の類義語との関係を明らかにし、より明確な「なんか」の意味をまとめる。

注

¹⁾ 尾上(1983)の定義による。奥津(1985)は不定詞、山口(1985)の疑問詞と呼んでいる。

不定語に関する先行研究から、森川(1991)はその性質について次のようにまとめている。

①不明・未知の対象を「空欄」として表示し、後から答えが補充されるのをまつ。

②「なに」ならば事物、「だれ」ならばひと、「どこ」ならば場所というように、答えとなる可能性のある要素の集合(要素群あるいは類概念)を包括的に示す。

つまり、不定語は、不明・未知の対象が属する要素群(類概念)の外延を示し、当該対象はこのうちのどれかであるという意味で指示するが、それ以上の特定をすることはない。

²⁾ ここでの対象とは話し手が意識を向け、それについて語ろうとする素材(題材)のことである。対象となるものには、現実存在する事物(「もの」)・事態(「こと」)のみならず、思考・想像などの内面に存在する事物・事態、あるいは内部感覚のようなものなどもある。しかし、対象は、たとえそれが後者であっても、完全に話し手の内面(認識体系)からは切り離された客観的な事物・事態として、話し手の意識が向けられるところのもの

である。(森川、1991)

3) 概念とは、あるものに与えられたいわゆる「名前」であり、それによって言語社会の成員がそのものを認知できる客観性、社会性を帯びたものである。

4) 例文の番号は用例出典¹⁰⁾とそのページ数を表している。1-34とは、用例出典①の34ページという意味。

5) 中西 (1955) 参照

6) 『基礎日本語辞典』(森田、1988)

連語 (代名詞的・副詞的)

「なに」に疑問の助詞「か」がつくことによって、それが何であるか不確か不明である状態。事物に対して実態把握ができない状態にも、原因に対して不明な場合にも用いる。

①代名詞的に用いられた場合

それとはっきり指示できぬ物・事を「何」で表し、それを行為・作用・現象・存在などの主体とするか、話し手の行為・欲望などの対象として据えるとき用いる。

ア。「何か(が)～自動詞/ほしい/～たい/できる/～られる」などの形で主語もしくは対象語にたてる

イ。「何か(を)～他動詞」の形で目的語にたてる。

ウ。「何かに/何かと/何かで/何かの」などの形でも用いられる。助詞「が/を」は文面に現れないことも多い。

エ。「AかBか」の形でBに「何」をたてる言い方もある。“Aかその他のそれに類した事物”

「何かいやな予感がする」と言えば、“それが何であるかわからないが”つまり予感の内容が何か不明であるという意味であるが、それは“原因不明の何となく”という意味に発展して、次の②を導く。

②副詞的に用いられる場合

「何か+形容詞/形容動詞」の形で、そのような状態になる原因が不明であることを表す。“どうしてか、なぜかわからない”つまり“どことなく”である。精神・感情・感覚など主観的な状態に用いる。

ex. 「何か不思議だ」「何か恐ろしくて、一人で行けない」「何かいやあな気持ちだ」
「あの曲を聞くと何か悲しくなってくる」

このような精神状態を間接に表す言い方として、動詞が後続することもある。

ex. 「あの曲を聞くと何か泣けてくる」「何かじいんと胸に来る」「何か一つ欠けている感じだ」

7) 「なんか」と結びつく文法的な形態をまとめると、次のようになる。(村田、1990)

①「動詞のて形+なんか+否定形ナイ」否定表現と呼応する。主動詞と補助動詞の間に入る「ーテイル」

② 「イ形容詞ーく+なんか+ない」 〃 「ナ形容詞+なんか」は
観察されなかった。

③ 「副詞+なんか+否定形ナイ」 〃

④ 「名詞/名詞句+ (助詞)+なんか+肯定形/否定形ナイ」

否定形ナイと呼応していない。しかし、自由に否定形や肯定形をとれるわけでは
ない。→否定の観点から見たときの「なんか」の及ぼす影響力の範囲を示唆する。

ア. Nかなんか 並立助詞 「など」に置き換えることができない。

「なん(なに)」+「か」と考えられる。

イ. Nやなんか 〃

ウ. Nとなんか 格助詞

エ. Nへなんか 〃

オ. Nになんか 〃

「なんか」の用法には、複数ものを列挙するような用法は極めて少ない。「なんか」
の機能という点から考えた場合、実際の用法においては、複数事物を列挙する機能より、
一つのものあるいは一つの事柄を取り立てる機能の方が強調される。

格助詞「と」と「に」は「なんか」と結びつく場合、「なんか」に後接することが多
い。

格助詞「へ」は「なんか」と結びつく場合、「なんか」に前接することが多い。

⁸⁾ 松浦 (1996) では「言いよどみ」(ポーズ、フィラー)と呼んでいるが、本稿では「フィ
ラー」と呼ぶ。

⁹⁾ 小出 (1983) 参照

¹⁰⁾ [用例出典]

① 吉本ばなな (1992) 『N・P』角川書店

② 北川悦吏子 (1996) 『ロングバケーション』角川書店

③ 山田太一 (1987) 『思い出づくり』大和書房

④ 山田詠美 (1992) 『放課後の音符』角川書店

⑤ 片岡義男 (1996) 『「彼女」はグッド・デザイン』太田出版

[主要参考文献]

奥津敬一郎 (1985) 「不定詞同格構文と不定詞移動」『都大論究』22号, pp. 1~12

尾上圭介 (1983) 「不定語の語性と用法」『副用語の研究』渡辺実編 pp.404~431,
明治書院

小出慶一 (1983) 「言いよどみ」『話しことばの表現』水谷修編 pp.81~88, 筑摩書房

中西宇一 (1955) 「不定詞の分類」『国語国文』24巻12号, pp.23~33

松浦和美 (1996) 「日本語の談話における言いよどみに関する研究」中国四国教育学会

第48会大会発表資料

- 村田年 (1990) 「「なんか」の用法①ー接続の形態からー」『日本語と日本語教育』第19号
pp.31~48, 慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター
- 森川結花 (1991a) 「不定表現についてー「なにか」を中心にー」『日本語・日本文化』
第17号、pp.145~160, 大阪外国語大学留学生別科・日本語学科
- 森川結花 (1991b) 「「なにか」の用法と意味・機能」『STUDIUM』, pp.97~111,
大阪外国語大学大学院研究室
- Senko k.Maynard(1990) “An introduction to Japanese grammar and communication strategies” pp.128~130, pp.258~259, The Japan Times

[辞書・辞典]

- 『大辞林第二版机上版』(1995) 三省堂 『岩波国語辞典第5版デスク版』(1994) 岩波書店
- 『岩波書店大辞泉』(1995) 小学館
- 『学研国語大辞典(第8版)』(1990) 学習研究社
- 『日本語大辞典第二版』(1980) 講談社
- 『広辞苑 第三版』(1983) 岩波書店
- 『基礎日本語辞典』(1988) 森田良行、角川書店